

隠喩理論：サールとレイコフ

The Theories of Metaphor : John R. Searle and George Lakoff

村 越 行 雄

要 旨

比喩研究の中でも、特に隠喩研究は盛んで、膨大な量の著書および論文が出版されてきた。実に多岐にわたる隠喩研究がなされてきたが、重要な流れの一つとして考えられるのが語用論的立場からの研究である。しかし、その流れに対抗する別の重要な流れがある。例えば、Lakoff は、1979/1980年を隠喩研究における革命的転換期であるとして、それ以前の研究を全面的に否定する立場からの研究が現在に至るまで盛んに行われてきたとしている。そこで、隠喩研究における二つの流れを調べる為に、それぞれの代表的な研究者である Searle と Lakoff に焦点を合わせ、Searle の隠喩の語用理論と Lakoff の現代隠喩理論 (Lakoff 自らが革命的であるとしている新たな隠喩理論) を検討することにする。今回は、*Metaphor and Thought* (『メタファーと思考』) を取り上げ、その論集に収められている Searle の論文 “Metaphor” (「隠喩」) と Lakoff の論文 “The contemporary theory of metaphor” (「現代隠喩理論」) を中心に検討することにする。なお、詳細に検討することはできないので、それぞれの特徴を説明し、問題点を指摘する程度で終えることにする。

Key words: 隠喩 (metaphor), 比喩 (trope), 文字どおりの意味 (literal meaning), 隠喩的意味 (metaphorical meaning), 語用論 (pragmatics), サール (John R.Searle), レイコフ (George Lakoff)

はじめに

比喩の中でも、特に隠喩(metaphor)に関しては、実に数多くの研究者が主要研究課題として取り上げ、様々な研究成果を公表してきた。そのような隠喩研究の流れの中で、注目すべき点は、*Metaphor and Thought*(初版1979年)⁽¹⁾と *Metaphors We Live By*(1980年)⁽²⁾が出版された1979/1980年を境に、隠喩研究の方向が大きく変わって、現在に至っていると主張されていることである。その代表的な例として、George Lakoffが挙げられる。前者の論集の第二版(1993年、初版に収められた21論文の内、本稿で検討する Levin の論文を含め、8論文が改訂され、更に本稿で検討する Lakoff, Gibbs, Glucksberg and Keysar の三論文を含め、六論文が新たに追加された)に収められている Lakoff の論文“The contemporary theory of metaphor”(1993年、「現代隠喩理論」)において、自らの理論を「現代隠喩理論」と呼び、多くの点で、革命的である⁽³⁾と力説し、隠喩研究における革命的転換期を1979/1980年(現代隠喩理論が初版に収められた Michael Reddy の論文“The conduit metaphor”(「導管のメタファー」)にまでさかのぼれるとして、1977年(初版の論集の大部分は、1977年9月、アメリカのイリノイ大学で開催されたメタファーに関する大会の発表を基にしている為)であるとしたり⁽⁴⁾、また別の箇所では、1970年代末期であるとしたり⁽⁵⁾、更にまた別の箇所では、1980年であるとしており⁽⁶⁾、多少の時間的ずれはあるが、活字となって、広く読者の目に触れる形になったという点で言えば、Reddy の論文が最初に現われた *Metaphor and Thought* 初版の1979年と、Lakoff の基本的な考え方が明確に現われた Lakoff と Mark Johnson の共著の *Metaphors We Live By* の1980年であると言える)であるとして、それ以降の調査・研究の過程で、日常的で、慣習的な隠喩の巨大な体系が初めて発見されたのであり、従ってそれ以前の研究では、その隠喩の体系の存在に気が付かなかつた為に、例えば、John R.Searle, Jerry L.Morgan などのように、誤って隠喩に関する語用理論を唱える結果になってしまった⁽⁷⁾と断定している。

Lakoff の主張する現代隠喩理論が、それ以前の、またはそれ以外の隠喩理論を全て、完全に駆逐してしまったかどうかの問題は、簡単に結論を出せるようなものではない。しかし、Andrew Ortony が指摘するように、L. Jonathan Cohen に典型的に見られる意味論的立場からの隠喩の説明、Searle に典型的に見られる語用論的立場からの隠喩の説明、そして Lakoff などに見られる意味論的・語用論的説明双方を否定する立場からの隠喩の説明という相違、別の視点から見れば、隠喩を純粹に言語的な現象として捉える立場、より一般的なコミュニケーションの現象として捉える立場、そして思考と心的表象として捉える立場という相違、更に別の視点から見れば、隠喩の問題を言語の理論によって処理する立場、言語使用の理論によって処理する立場、そして心的表象の理論によって処理する立場という相違がある⁽⁸⁾として、そのような相違に隠喩研究の代表的な流れの特徴が見い出されると言うことはできる。そして、どちらの流れがより妥

当性を持つのかの判断は別にして、前掲のLakoffの論文に載せられた、*Metaphor and Thought*の初版(1979年)から第二版(1993年)までの間に公表された現代隠喩理論に関する論文・著書の簡単な文献目録からもうかがえるように、1979/1980年を境にして、Lakoffの言う現代隠喩理論という新たな隠喩研究の流れが始まり、現在まで続いていることは事実であり、少なくとも隠喩研究における一つの、重要な流れとして正当に評価することはできるであろう。

本稿では、*Metaphor and Thought*第二版(前述したように、初版から改訂されてない論文もあれば、改訂された論文もあり、また新たに加えられた論文もあり、各論文の出版年度は異なるが)の論集の内、SearleとLakoffの隠喩理論に係する六論文を検討することにする。その理由の一つは、Lakoffの言う現代隠喩理論という隠喩研究の流れがある一方で、Searle(または、Grice/Searle)の隠喩の語用理論という隠喩研究の流れも、現在でも多くの支持者を持つ重要な流れであることには変わりないからである。しかし、今回は、残念ながら、簡単な検討で終えることにする。

Searleの隠喩理論に対する評価

隠喩に関する語用理論の典型的な例として考えられるのが、H.P. Griceの会話含意理論、またはSearleの言語行為理論に基づく隠喩理論であるが、ここで取り上げるSearleの論文“Metaphor”(1979年、「隠喩」)は、その代表例であると言える。Searleの隠喩理論の要旨(あくまでも、一部にすぎないが)は、簡単に言えば、次のようになる。

例えば、文“It’s getting hot in here”(「ここは、熱くなってきた。」)は、様々な会話の場面で発話されるが、発話される場所の温度が上がって、熱くなっていることを伝える為に発話される場合(literal utterance, 文字どおりの発話)もあれば、熱くなってきたので、窓を開けてくれるように要請する為に発話される場合(indirect speech act, 間接的言語行為)もあれば、寒いと不平を言う為に発話される場合(ironical utterance, 反語的発話)もあれば、議論が進むにつれて、ののしりあいが増えつつ激化していることを言う為に発話される場合(metaphorical utterance, 隠喩的発話)もある訳で、文字どおりの発話(文の意味=話し手の意味)は、その他の発話(文の意味≠話し手の意味)とは異なることになる⁽⁹⁾。

以上の例が示すように、隠喩は、反語と間接的言語行為と同様に、文の意味と話し手の意味の不一致によるものであり、同時に、文の意味が何らかの形で話し手の意味と関係しあっているものである。そのことは、隠喩の意味を文の中に求めること(純粹に意味論的な立場から隠喩の意味を解明すること)への批判につながり、そして文の意味(または、語の意味)が隠喩的になることは決してなく、話し手の意味のみが隠喩的になりえることを示すことになる。結局、隠喩の問題は、文字どおりの文の意味(literal sentence meaning)と話し手による発話の意味(speaker’s utterance meaning)の関係に関することであり、文字どおりの文の意味に隠喩的意

味を求めることができない（文または語の意味は、文または語がそれ自体で意味するものを正確に、かつ文字どおりに表すものである）以上、隠喩の意味は、いつも必ず話し手による発話の意味として捉えるしかなく、従って話し手の意図に関するものとなる¹⁰⁾。

隠喩（隠喩的発話）とは、話し手があることを言い、そして別のことを意味することであり、その一般形式は、「話し手が“S is P”という文形式を発話し、そして“S is R”を隠喩的に意味すること（Pは、明白にRを意味しない場合）」になる。そこで、聞き手側から見れば、発話“S is P”を聞いて、話し手が“S is R”を意味していることを理解しなければならない。その為には、まず最初に、耳にした発話に関して、隠喩的解釈をする必要があるのかを聞き手は決めなければならない。例えば、聞き手が発話“Sam is a pig”（「Sam は、豚である。」）を聞く場合、その発話を文字どおりに受け取れば、真ではありえないこと、従ってその発話を文字どおりに受け取れば、欠陥があることを知り（Sam という人間は、豚ではないので）、そのことによって隠喩的解釈（文の意味とは異なる話し手の意味を理解する為）の必要性を知ることになる。そして、最終的に隠喩の意味“Sam is filthy, gluttonous, sloppy, and so on”（「Sam は、不潔で、貪欲で、だらしなく、……である。」）を理解することになる。欠陥性としては、明かな誤り、意味的なナンセンス、言語行為規則の違反、そしてコミュニケーションに関する会話原則の違反が挙げられる¹¹⁾。

多くの比喩研究者がそのような Searle の隠喩理論を検討対象として取り上げていることから、その影響力の強さが感じ取れるが、新たな隠喩理論の可能性を探る上で、どのように評価しているのかが重要になると言える。ここで、幾つかの例を挙げることにする。論文“Observations on the pragmatics of metaphor”（1979年、「隠喩の語用論に関する所見」）において、Morgan は、前掲の Searle の論文で示される隠喩の説明を基本的には受け入れ、隠喩の理解の為に、文の意味と発話の意味を区別すること、そして隠喩を発話の意味の問題、従って語用論の領域に属する問題であるとすることに同意し、意味論的な立場から隠喩を文の属性として捉えることに反対し¹²⁾、Searle 支持の立場を明らかにする。同様に、Searle の説明を基本的に受け入れながらも、異なる結論に至るのが、Samuel R. Levin の場合である。論文“Language, concepts, and worlds: Three domains of metaphor”（1993年（1979年の改訂版）、「言語、概念、そして世界：隠喩の三領域」）において、欠陥性の存在、そして文の意味と発話の意味の区別を認める¹³⁾が、Searle とは異なる意味合いを持っており、結果的には、隠喩を語用論的な考察が必要なものと、意味論的な考察が必要なものとに区別することになる。

Morgan にしても、また Levin にしても、Searle の隠喩理論を隠喩研究にとって重要な意義を持つものであるとする点では、一致しているが（前者の方が、より積極的に Searle 支持の立場を表明しているが）、批判の仕方に相違が見られる。Searle 批判の一つは、隠喩の分類の仕方（Searle 自身、隠喩的解釈に関する八原則の中で、隠喩の事例を分類しており¹⁴⁾、更に死喩

(dead metaphor) と純粹な隠喩 (genuine metaphor) を区別しているが⁽¹⁵⁾ に対してである。Morgan によれば⁽¹⁶⁾、隠喩を貯蔵された隠喩 (stored metaphor) と新鮮な隠喩 (fresh metaphor) に区別する必要があるが、貯蔵された隠喩は、すでに慣習的になっており、皆がよく知っているが、まだ慣用句 (idiom) にはなっておらず、隠喩的に理解される必要があるが、文字どおりの意味から隠喩を理解する過程は回避できる (short circuit) ような隠喩のことであり、それに対して、新鮮な隠喩は、以前に出会ったことのない、真の意味で、理解する必要があるが、まず最初に、文字どおりの意味を理解しようとし、もしそれに失敗すれば、隠喩として理解するという過程を必要とするような隠喩のことであり、隠喩理論にとっての中心的な問題は、新鮮な隠喩の方であるということになる。そして、慣用句は、もはや隠喩と言えるようなものではなく、言語表現が二つの文字どおりの意味を持つもので、両義的 (ambiguous) なものであるということになる。貯蔵された隠喩の例としては、“John is a pig” (「John は、豚である。」)、新鮮な隠喩の例としては、“John’s bank account is a pharaoh’s burial treasure” (「Johnの銀行預金口座は、ファラオの埋葬財宝である。」)、そして慣用句の例としては、“kick the bucket” (第二の文字どおりの意味として、die (「死ぬ」) の意味を持つ) が挙げられている。以上の分類に基づいて、Searle の例の内、少なくとも幾つかは、明らかに貯蔵された隠喩か、または慣用句に属するものであると批判する。

事実、Morgan が批判するように、隠喩的解釈に関する八原則で挙げられている Searle の例は、貯蔵された隠喩、または慣用句に属するものもあると言えよう。例えば、隠喩的解釈に関する原則の内、第一原則では、“Sam is a giant” (「Sam は、巨人である。」)、第二原則では、“Sam is a pig”, 第三原則では、“Richard is a gorilla” (「Richard は、ゴリラである。」)、第四原則では、“Sally is a block of ice” (「Sally は、氷のかたまりである。」)、“Mary is sweet” (「Mary は、甘い。」) などが挙げられている。以上のような例 (下線部の言葉が、隠喩の部分を示す) などは、よく知られており、すでに慣習的になっており、文字どおりの意味 (括弧内の日本語訳が文自体の文字どおりの意味である) から隠喩を理解する過程が回避できる貯蔵された隠喩の例であるか、すでに慣用句になっている例であると言えるであろう。Searle 自身も、感情の欠如の隠喩としての “cold” (a block of ice が持つ性質の一つに cold があるので、“Sally is a block of ice” は、“Sally is cold” に言い換えられるが、“cold” (冷たい) は、感情に関するものではなく、あくまでも温度に関する冷たさであり、従って感情の欠如の隠喩として使用される) が、死喩になりつつあるか、すでに死喩になってしまっていることを認めており、更に辞書には、“cold” の意味の一つとして、感情の欠如が載っていると述べている。同様な扱いができるものとして、感情的特性と個人的特性に対する温度の隠喩 (“heated argument”, “warm welcome” など)、時間の継続に対する空間の隠喩 (“time flies” など)、個人的特性に対する味覚の隠喩 (“sweet disposition”, “bitter person” など) などを Searle は挙げている⁽¹⁷⁾。下線部の言葉は、本来温度、空間、味覚に関するものでありながら、隠喩として別の意味で使用されているのであり、しかも

それは一般的で、よく知られており、慣習化されていると言え、その意味で、死喩 (Morgan の貯蔵された隠喩) として扱えるものであるが、Searle の場合、上記の例全てが、文字どおりの意味から隠喩を理解する過程を必要とするもの (Morgan の新鮮な隠喩) として扱われていると言えよう。また、Morgan が前掲の “cold” を一種の慣用句であり、第二の文字どおりの意味を持つことになり、“Sally is a block of ice” も、“kick the bucket” と同様の扱いがされているが (もしそうであれば、heated, warm, fly, sweet, bitter など、同様であろう)、Searle にとっては、それも Morgan の言う新鮮な隠喩として扱われていると言えよう。

Searle は、純粋な隠喩と死喩を区別し、文字どおりの文の意味→欠陥性→隠喩的意味という隠喩理解過程 (まず最初に、発話される文の意味から出発し、その発話を文字どおりに受け取ると、何らかの欠陥性が見い出される時は、その文自体の文字どおりの意味に欠陥があることになり、そのことで、その発話を文字どおりにではなく、隠喩的に解釈する必要性が生まれ、そこから文の意味とは異なる隠喩的意味へと最終的に辿りつく訳で、あくまでも文字どおりの文の意味を経て、隠喩的意味に辿りつく過程であって、もし何の欠陥もなければ、文の意味と発話の意味が一致することになり、文の意味の段階で終わり、文字どおりの発話ということになる) を必要とするのが純粋な隠喩であり、そのような隠喩理解過程を必要としない (発話される文は、最初の文の意味が無視され (bypassed)、以前の隠喩的意味と一致する、新たな文字どおりの意味を獲得することになり、隠喩的発話が文字どおりの発話へと移行することになる) のが死喩 (文字どおりの意味からの隠喩理解過程を必要としない点では、Morgan の貯蔵された隠喩に、また発話される文が新たな、別の文字どおりの意味を獲得する点では、Morgan の慣用句に共通する) であるとしている¹⁸⁾。もしそうであれば、文字どおりの文の意味→欠陥性→隠喩的意味という隠喩理解過程を隠喩理論の中心に据える Searle にとっては、本来質的に異なるものを、明確に区別しないで混在させることは、危険である。しかし、死喩 (または、使い古された隠喩 (trite metaphor)) は、継続的使用によって死んだ隠喩になったが、生き残ってきた隠喩でもあり、従って隠喩研究にとって興味深いものであり、死喩の例が混在しても、申し訳なく感じる必要はないと Searle は言うのである¹⁹⁾。どういうことなのであろうか。論文 “Metaphor” では、本格的に検討はしなかったが、死喩研究は重要であるという意味であらうか。それとも、死喩の例も純粋な隠喩として扱う理由があるのであろうか。例えば、「豚」を意味する異なる語を使用して、“Sam is a pig”, “Sam is a hog”, そして “Sam is a swine” は、隠喩的に異なるとか、“Sam is a pig” と “Sam’s car is a pig” (「Sam の車は、豚である。」: 豚が餌を食べるのと同じように、車がガソリンを消費すること、または車が豚のような形をしていることを意味する) は、隠喩的に異なるとか Searle は言う²⁰⁾が、隠喩的表現 (豚) と文字どおりの表現 (Sam, Sam の車) の関係の仕方によって、死喩と思われる例が、いつも必ず死喩であるとは限らないということなのであろうか。

Levin は、Morgan とは異なる分類を主張する。Levin は、Searle の例の大部分が日常的に出会

う隠喩であるが、隠喩一般を理論化する為には、詩的または文学的隠喩の解明が不可欠であり、そのことが隠喩理論の見直しにつながるとしている。Searle の四つの欠陥性の内、明かな誤りと意味的なナンセンス（Searle の例で言えば、“Sally is a block of ice” が明かな誤りで、“The ship ploughs the sea”（Searle 自身認めているように、文字どおりの意味を別の言葉に言い換えることはできないが²¹⁾、文字どおりに日本語訳をすれば、「その船は、海をすきで耕す／すきで掘り起こす」となる）が意味的なナンセンスになる）を一つにまとめて、意味的一貫性の規則の違反とし、意味論の領域に属するものとし、それに対して、言語行為規則の違反とコミュニケーションに関する会話原則の違反は、語用論の領域に属するものとされ、前者とははっきりと区別される。そして、意味的一貫性の規則に違反すれば、発話の各構成要素が互いに意味的に両立できないことになり、言語行為規則または会話原則に違反すれば、発話の各構成要素の間では、意味的に両立するが、文の意味と、その文が発話される非言語的コンテキスト（発話される状況）が両立できないことになる。そのような意味的非両立性と意味的両立性に基づいて、分類が行われる。例えば、“That was a most intelligent remark”（「それは、非常に気のきいた意見であった。」）と“Your radio is making a lot of noise”（「君のラジオは、大変な音を立てている。」）は、意味的一貫性の規則に違反しておらず、意味的には完璧に理解できるものであり、従って意味的両立性が存在していることになり、文字どおりの発話と言えるものである。しかし、文の意味と非言語的コンテキストが両立できないような状況で、同一の文が発話される場合、前者を反語的発話として、また後者を間接的言語行為として受け取ることができる。同様の解釈は、Searle の例“I have climbed to the top of the greasy pole”（「私は、つるつる滑りやすい柱のてっぺんまで登った。」）にも可能となる。前例と同様に、意味的両立性が存在するので、文字どおりの発話と受け取ることもできるし、つるつる滑りやすい柱もなければ、登ったという行為も存在しない状況で、Disraeliが首相になった時に発話すれば、文の意味と非言語的コンテキストが両立しない為、隠喩的発話と受け取ることもできる。そのような文は、多義的隠喩（equivocal metaphor）と呼べるとしている。それに対して、“Souls clap its hands and sing”（「魂は、手をたたいて、歌う。」）のような詩的または文学的隠喩は、多義的隠喩とは異なり、意味的一貫性の規則に違反しており（魂が手をたたいて、歌うということは、意味的には矛盾する為）、意味的非両立性が存在することになる²²⁾。

Levin に従えば、隠喩が多義的隠喩と詩的・文学的隠喩に区別され、反語、間接的言語行為、そして多義的隠喩は、意味的両立性が存在する為、発話される状況に応じて、同一文が文字どおりの発話としても使用されるし、また反語的発話、間接的言語行為、または隠喩的発話としても使用できることになるので（文の意味と非言語的コンテキストの非両立性が存在するような状況下）、語用論の領域に属するものになるが、詩的・文学的隠喩の場合は、意味的非両立性が存在する為（発話の各構成要素間の意味的非両立性）、意味論の領域に属するものになる。結局、全

てを語用論の領域に属するとする Searle に反して、反語、間接的言語行為、そして多義的隠喩に関しては、Searleの主張を受け入れながらも、詩的・文学的隠喩に関しては、むしろ意味論の領域に属するものとし、Searle の主張を批判することになる。そして、意味的非両立性を基準にして考える限り、詩的・文学的隠喩のみならず、日常的な隠喩（前述の Searle の例（多義的隠喩の例を除く）にも、意味的非両立性が存在するので）も同様に扱えるはずであり、Searle の隠喩理論にとって、Levin の言う意味的非両立性の例が中心である以上、Searle の隠喩理論の全面的な否定につながることになるであろう。しかし、そこまで考えていたかどうかは、不明である。というのは、隠喩的発話を文字どおりに受け取って、意味的非両立性（Searle にとっては、欠陥性）が見い出されれば、Searle の場合、次の段階として、文の意味とは異なる話し手の意味（隠喩的意味）を推論していくことになるが、Levin の場合は、例えば、詩 “The sky is angry”（「空が怒っている。」）を読む時、空が怒っているような世界を心に描き、そのようなものとして捉えるのであり、超自然的な隠喩的世界の概念が忠実に表現されるのが隠喩的発話であって、欠陥性は発話ではなく、詩人の描く世界にあり、隠喩的と言えるものは、言葉ではなく、言葉によって映し出される世界（隠喩的世界）にあるという具合に、隠喩的発話は、正にその言葉が実際に言っていることを意味するにすぎない（従って、隠喩的発話を理解する為に、発話される文の意味とは異なる発話の意味を推論する方向ではなく、文の意味にとどまり、文によって描かれる、そのままの隠喩的世界を読み取ることになる）とされているからである²³。つまり、詩的・文学的隠喩の解明方法をそのまま日常的な隠喩にまで適用できるかどうかは、少なくとも前掲の Levin の論文を見る限り、明確ではないと言えよう。Levin の言うように、詩人・文学者ならば、魂が手をたたいて、歌ったり、空が怒っていたりするような隠喩的世界を心に描くことができるし、そのような概念を忠実に言葉に表すのが詩であり、文学であると言えるが、日常的な隠喩の場合、一般の人々がそのような隠喩的世界を心に描き、その概念を忠実に表すのが隠喩的発話であると言えるであろうか。その点に関しては、ここで検討することはできないが、ただ興味深い視点であり、更に検討する必要があると思われる。

次に、Searle の隠喩理論を根本的に批判する例を三つ挙げることにする。Raymond W.Gibbs, Jr の論文 “Process and products in making sense of tropes”（1993年、「比喩理解における過程と所産」）、Sam Glucksberg and Boar Keysar の論文 “How metaphors work”（1993年、「隠喩の働き」）、そして Lakoff の論文 “The contemporary theory of metaphor”（1993年）は、調査分析などによる実験成果に基づいて、標準的な（伝統的な）語用論的見解を批判するという点で、共通している。Gibbs によれば、比喩言語（比喩）が会話の規範（例えば、Grice の会話の格率）に違反すると捉える標準的な語用論的見解（Grice/Searle の見解が中心）は、三つの、互いに関係し合う主張につながり、文の文字どおりの意味の分析が強制的で、比喩的意味が決められる前に必ず実施されること、比喩を理解する為に、文字どおりの意味以外の意味を探索する前に、欠陥

のある文字どおりの意味が見つげ出されなければならないこと、そして比喩的意味を引き出す為に、追加の、余分な推論が必要になることが、三つの主張となる。そして、心理言語学的実験の結果を見れば、聞き手と読み手は、現実的で、社会的なコンテキストの下で聞いたり、見たりすれば、文字どおりの意味を分析し、拒否することから始めるのではなく、直接的に、隠喩、換喩、皮肉、慣用句、諺、そして間接的言語行為の比喩的解釈を理解できること、比喩的意味の探索のきっかけとなる欠陥のある文字どおりの意味なしに、隠喩などは、無意識のうちに解釈されること、そして隠喩、換喩、反語、そして間接的言語行為は、それらとほぼ同等の文字どおりの表現（発話）の場合と同じ種類のコンテキストに関する情報を必要とするにすぎないことがはっきりするので、標準的な語用論的見解の誤りが明確になるとしている。更に、比喩が会話の規範の違反であると誤解するのは、文字どおりの意味と言語理解の時間経過に対する混乱した捉え方によるものであるとしている⁽²⁴⁾。

Glucksberg and Keysar は、隠喩理解に関する標準的な語用論的見解の問題点が、文字どおりの文の意味を無条件の優先権を持つものとして前提にしていることにあるとする。例えば、文の意味は、聞き手によって絶えず産み出され、しかも別の意味を考慮する前に、絶えず産み出されるもので、文字どおりの意味を得ることは、話し手の意味（隠喩的意味を含む）を決める為の第一段階として常に存在し、その後、文の意味に欠陥があるかどうかを決めることが、第二段階として続くことになり、もし欠陥がなければ、聞き手は文の意味を話し手の意味として受け入れ、もし欠陥があれば、話し手の意図する別の意味が何であるかを決めなければならないことになる。そして、文字どおりの意味が無条件の優先権を持っているのであれば、発話を文字どおりに解釈する方が、それ以外の解釈よりも簡単でなければならないが、“kick the bucket”のような慣用句は、全く簡単に理解され、すぐにその意味を思い出すので、文字どおりの意味を完全に無視することができるのであり、新奇な隠喩（novel metaphor）も、それとほぼ同等の文字どおりの表現（発話）と同様に、簡単に理解されるのであり、また隠喩的意味の探索の前に、きっかけの条件として欠陥のある文字どおりの意味が必要とされているが、大学生の調査によれば、隠喩的意味（慣習的隠喩の場合）が無意識のうちに理解され、結局そのきっかけの条件は必要でなく、たとえMorganの新鮮な隠喩であっても、適当なコンテキストが与えられれば、すぐに理解されるのであって、結局新鮮な隠喩を理解するのに、欠陥のある文字どおりの意味は、きっかけの条件として必要ないことになる。以上の実験成果に基づく結果から、文字どおりの文の意味が、いつでも、どこでも、無条件に優先権を持つことはなく、また隠喩的意味の理解の為に、欠陥のある文字どおりの意味をきっかけの条件として必要とするのではなく、結論的に、隠喩の理解は、文字どおりの発話の理解と原則的には変わらないとしている⁽²⁵⁾。

Lakoffについては、あとで検討するので、簡単に触れる程度にする。最大の問題点は、伝統的な文字どおりの言語と比喩言語の区別にあり、その区別に基づいて、文字どおりの文の意味か

ら開始し、文の隠喩的解釈に辿りつく過程、言い換えれば、文字どおりの意味を入力し、隠喩の意味を取り出すような過程として隠喩的文を捉えることになってしまっている。しかし、隠喩的文の意味（隠喩的意味）は、そのような過程によって得られるものではなく、日常的で、ごく普通の知識と、日常的で、慣習的な隠喩（conventional metaphor）の体系から得られるものであるとしている。そして、人々が発話する大部分の文に現われる隠喩は、慣習的隠喩であり、慣習的であるが故に、努力なしに、また自覚なしに、絶えず、無意識のうちに使用されるのであり、従って隠喩の大部分が、日常的で、慣習的な隠喩の体系にあり、慣習的隠喩と比べれば、稀にしか現われない新奇な隠喩は、その隠喩体系を基礎にし、それを利用するのであって、それと離れて、独立して現われることは稀であるとしている。その意味で、Searleの隠喩理論は、そのような隠喩体系が与えられれば、不必要なものになる。また、文字どおりの言語と比喩言語の区別は、文字どおりのものが隠喩的になることはないということを必然的に伴うが、そのような区別は、「文字どおりの」という言葉に関する伝統的な誤った仮定（例えば、全ての、慣習的な日常言語は、文字どおりもので、決して隠喩的ではないとか、全てのテーマは、隠喩を介せずに、文字どおりに理解されるとか、その他の誤った仮定）に基づくもので、1979/1980年以降に、日常的で、慣習的な隠喩の体系が発見されたことで、破壊されたとしている²⁶⁾。

以上の三論文に共通していることは、標準的な語用論的見解（Lakoffは、古典的理論と呼ぶ）をGrice/Searleの理論、特にSearleの隠喩理論を基にして捉えていること、Searleの隠喩理論の中心を成す、文の意味と話し手の意味の区別に基づく、文字どおりの文の意味→欠陥性→隠喩的意味（話し手の意味）という隠喩理解過程を最大の攻撃目標にしていること、隠喩理解の心理的側面の解明を目的にした、聞き取り調査、言語表現の分析、その他の実験（観察）と言った経験的（実験的）研究から得られた証拠を根拠にして批判していることなどである（但し、Gibbsの場合は、Lakoffと同じ立場に立っているが、隠喩が比喩の中心を成し、それ以外の比喩が無視される傾向に反発して²⁷⁾、隠喩以外の、換喩、反語、誇張法、緩叙法、撞着語法、慣用句を分析している）。第一に関しては、たとえGrice/Searle的な隠喩理論を否定できたとしても、それが同時に、その他の隠喩の語用理論の可能性を全て否定することにはならないし、Gibbsが語用論的知識の重要性を強調する²⁸⁾ように、語用論的な要素の介入を全て否定することにはつながらないと言える。また、GibbsとGlucksberg and Keysarは、論文の結論部分で、Grice/Searleの理論的枠組みを否定する意図はなく、むしろその意義を積極的に認めると言っている²⁹⁾。従って、主としてSearleの隠喩理解過程（比喩全般とも言えようが、論文“Metaphor”では、実際には隠喩の分析が中心で、反語の簡単な分析が最後に付け加えられる程度である）が、直接の批判対象になっている。そして、第三に関しては、例えば、言語哲学者であるGriceとSearleに対して、言語哲学は、経験的（実験的）研究の方法ではなく、哲学的分析の方法のみで探求する先験的学問であって、経験的学問ではなく、その為1979/1980年以降の隠喩に関する経験的（実験

的) 研究から得られた証拠全てが、大部分の言語哲学者にとって重大な問題にならないのであるとして、Lakoff は批判を加える³⁰⁾が、勿論実験データの重要性は否定できない(どのような実験を実施するのか、実験データの量がどの程度なのか、また実験データをどのように集計し、読み取り、利用するのかによって、当然異なる理論が引き出されるであろう)と同時に、純粹に理論的な考察も極めて重要であり、いずれの方法を取るにしても、真の隠喩理論を構築することは可能であると言えよう(また、言語哲学を単純に先験的学問であって、経験的学問ではないと断定することは、危険である)。

第二の Searle の隠喩理解過程に対する批判に関しては、どうであろうか。最大の攻撃目標は、文字どおりの文の意味の捉え方 (Glucksberg and Keysar の無条件の優先権、Lakoff の伝統的な誤った仮定、Gibbs の文字どおりの意味の概念的混乱³¹⁾) にあり、あくまでもそれを基にする限り、隠喩の意味とのずれが生まれ、文字どおりの意味と隠喩の意味の区別が必要になり、文字どおりの意味→隠喩の意味に辿りつく為には、きっかけの条件として文字どおりの意味の欠陥性(または、Grice の質の格率(真実性)の違反、つまり、真ではなく、偽である)が必要になってくるという具合になる。Searle の例 “Mary is sweet” を使用すれば、その意味を「Mary は、甘い。」であるとして、文字どおりの文の意味として捉える限り、話し手が伝えようと意図する意味との食い違いが生まれ、その隠喩の意味を得る為には、文字どおりの意味に欠陥(人間である Mary に対して、味覚の sweet を使用すること)があると考えるしかなく、それをきっかけにして隠喩の意味である “Mary is gentle, kind, pleasant, and so on” (「Mary は、優しく、親切で、愛想がよくて、……である。」) に辿りつくことになる。そのような文字どおりの文の意味を媒介にする間接的推論過程(文字どおりの発話における推論過程の他に、追加の、余分な推論過程を必要とする)に対して、文字どおりの文の意味を媒介にしない(従って、文字どおりの文の意味の欠陥性も必要としない)直接的推論過程によって隠喩の意味が得られるとし、従って文字どおりの発話の理解と明確に区別できるものではないと彼らは主張する。別の視点から見れば、現実をあるがままに映し出す文字どおりの言語(例えば、暑ければ、暑いと言い、雨が降っているならば、雨が降っていると言い、彼女が美しければ、彼女が美しいと言う)こそが、科学的で、客観的で、真であり、言語使用の中心はそこにあり、隠喩言語(より一般的に、比喩言語)は、現実をあるがままに映し出さず、むしろ現実をねじ曲げるもので、詩とか、文学とかの特別な修辭的目的で使用されるもので、稀で、例外的なものであるという見解を伝統的なものとし、Grice/Searle がそれに従っていると Gibbs と Lakoff は批判し、隠喩(または、比喩)の遍在性を強く主張すると言える。

まず最初に、言語が現実世界を正確に、真に表現しているかどうかによって、その言語表現の意味が真であるか、偽であるかが判断されるという見解は、伝統的であり、また現在でも否定できないものであると言え、Lakoff 自身も、文字どおりの言語が広範囲に使用されていることを

認めている⁽³²⁾のであり、むしろ問題は、隠喩言語（または、比喩言語）が特別で、例外的な目的でしか使用されないという見解にあると言える。Lakoffによれば、1979/1980年以前は、慣習的隠喩の体系に気付く人はほとんどいなく、隠喩が新奇な隠喩を意味すると受け取られてきたが、日常言語では、実際は慣習的隠喩が主で、新奇な隠喩が稀なものである⁽³³⁾ということになる。事実、Searleにしても、Morganにしても、隠喩理論の中心に純粋な隠喩または新鮮な隠喩の分析があり、言い換えれば、新奇な隠喩が分析対象になっている。しかし、Lakoffの慣習的隠喩は、日常言語において、よく知られており、慣習的になっているもので、Searleの死喩・慣用句とMorganの貯蔵された隠喩・慣用句と類似するものとも言え、Lakoffと同様に、SearleとMorganにとっても、文字どおりの文の意味を媒介にせずに理解できるものであり、文字どおりの発話として扱えるものである。勿論、Lakoffの新奇な隠喩＝Searleの純粋な隠喩／Morganの新鮮な隠喩、そしてLakoffの慣習的隠喩＝Searleの死喩・慣用句／Morganの貯蔵された隠喩・慣用句という具合に、単純な言い方はできないが（Morganが批判するように、Searleの純粋な隠喩には死喩・慣用句が含まれていること、Morganにとっては、新鮮な隠喩が中心で、貯蔵された隠喩がそこから引き出される派生的なものであること、Lakoffにとっては、慣習的隠喩の体系によって慣習的隠喩が理解され、その中核を成す体系が新奇な隠喩の理解にも利用されること、しかも隠喩と隠喩的表現を明確に区別しており、隠喩の捉え方が根本的に異なること、その他の相違点があり、隠喩の理論的枠組みが異なるが）、もしそのような単純化をすれば、日常的な発話の場面で頻繁に使用される死喩・慣用句を、本来の意味での隠喩であると捉えるならば、Lakoffが言うように、隠喩（慣習的隠喩と新奇な隠喩）の遍在性が主張できるであろうし、本来の意味での隠喩から除くべきであるとするならば、SearleとMorganのように、隠喩（純粋な隠喩または新鮮な隠喩）の使用が日常言語の中心にはなれない（言語使用状況における位置付けに関してであって、数量的問題ではなく、従って使用頻度の数量的少なさを必ずしも伴う必要はない）と言えよう。

次は、文字どおりの文の意味の捉え方に関してである。文自体を発話状況から切り離して、文の純粋に言語的な意味として捉えれば、文字どおりの発話であっても、隠喩的発話であっても、まず最初に、文の言語的意味を頭に描き、その意味がわからなければならないことになる。というのは、もし文の言語的意味が全く無視されれば、例えば、話し手の文法的な誤り、語の取り違え、その他の誤りに気が付かず、話し手の言うことを聞いていないのと同じになってしまうからで（音は聞こえても、意味が一つも頭に浮かばない状態）、文の言語的意味がわかることが出発点であることは、否定できないからである。そして、文字どおりの発話は、文を文字どおりの意味で発話することであるが、発話される文の文字どおりの意味を理解する為には、その文の言語的意味だけでなく、その言語的意味の一部を成すコンテキスト依存的な要素（例えば、指示代名詞、人称代名詞、時・場所の副詞などは、コンテキストに応じて、指す対象が変化する）、言語

的意味の一部を成さないコンテキストに関する知識、その他の情報が必要になってくる。そのように考えれば、文字どおりの文の意味は、文の言語的意味（コンテキストから切り離された、文法と語の意味によるもの）と発話文の文字どおりの意味（コンテキスト依存的）に区別できるであろう。その区別を利用すれば、隠喩理解過程は、Searle の場合、文の言語的意味→発話文の文字どおりの意味→隠喩的意味となり（文字どおりの文の意味の二重性がある）、Gibbs, Glucksberg and Keysar, そして Lakoff の場合、文の言語的意味→隠喩的意味となると言える（共通して言えることは、明確に示されている訳ではなく、ある種の混乱があるが、文の言語的意味が本来の開始点であること、そして文字どおりの文の意味を発話文の文字どおりの意味として捉えていることである）。そのことによって、文の言語的意味以外に、発話文の文字どおりの意味を介入させることで、文字どおりの意味が基準にされていること（現実を正確に、真に表現する言語表現（文字どおりの発話）こそが、言語使用の基準となるもので、しかもコンテキスト依存的であること）が、より明らかになるであろうし、また文の言語的意味とコンテキストが与えられれば、発話文の文字どおりの意味を必要とせずに、隠喩的解釈が可能であり、隠喩的意味が得られるとする考え方も理解できるであろう（文の言語的意味の介入を否定するのであれば、不可能であるが）。しかし、文字どおりの意味を基準にすることが、隠喩が現実をねじ曲げる表現であるとか、特別な修辭的目的にしか使用できないとか、稀で、例外的なものであるとかを直接意味するとは必ずしも言えず、むしろ絶対的に従うべき基準ではなく、様々なずれが生じる発話を説明する為に必要な一種の判断基準であると理解することはできるであろうし、また文の言語的意味→隠喩的意味という隠喩理解過程にしても、その橋渡しの説明がどのようにされるのか、どのような隠喩理論によってされるのかが問題で、そこに妥当性が見い出されなければ、否定されることになってしまうであろう。

Lakoff の現代隠喩理論

隠喩を言語に求めるのではなく、言語以外に求める傾向は強く、Searle の話し手の意図（話し手が意図する意味として隠喩的意味を捉える）と Lakoff の思考のような心的領域は、その典型例である。ここで、論文“The contemporary theory of metaphor”（1993年）で示されている隠喩に関する Lakoff の理論の一部を簡単に述べることにする。

隠喩は、本質的には言語的ではなく、概念的であり、主として慣習的であり、そのような日常的に使用される、慣習的で、概念的な隠喩の解明（つまり、慣習的な概念的隠喩の体系の解明）が中心で、それを基にして、新奇な隠喩なども解明される。まず最初に、「隠喩」という用語は、混乱した形で使用されてきたが、「隠喩」は、概念領域間交差の写像（mappings across conceptual domains）のことで、「隠喩的表現」は、そのような領域交差の写像が現実化して表面に現われる個々の言語表現のことで、両者を区別する必要がある、その区別によって、一つの隠喩が多

くの異なる言語表現となって現実化することが理解でき、そのことは、隠喩自体が直接そのままの形で現われる必要はなく（隠喩の体系は、私達概念体系の一部として、その下位体系としてあり、私達の心の中に存在するものである）、むしろ様々な具体的な形となって、個々の言語表現として表面化する訳で、言語表現自体が隠喩であることにはならないことを意味するとしている。

次に、慣習的な概念的隠喩の例として、LOVE IS A JOURNEY metaphor (mapping)（「恋愛は、旅である」隠喩（写像））を挙げて、説明している。恋愛関係を例に取れば、“Our relationship has hit a dead-end street”（「私達の関係は、袋小路に打ち当たった。」）、下線部が隠喩的表現である。なお、言語表現自体の意味を明確にする為に、直訳をするが、慣用句などのように、直訳では意味がはっきりしないときは、（ ）内で別の訳をする）、“It’s been a long, bumpy road”（「長く、でこぼこの道であった。」）、“We’re at a crossroads”（「私達は、交差点にいる（岐路に立っている。））などは、恋愛が旅として概念化されている例で、「恋愛は、旅である」隠喩が異なる言語表現となって現実化した例である。それは、ある心的（または、概念）領域（恋愛）を別の心的領域（旅）の観点から概念化する慣習的方法が隠喩の特徴であること、つまり隠喩が起点領域（source domain：旅）から目標領域（target domain：恋愛）への写像として理解されることを表している。その写像とは、起点領域に属するものが、目標領域に属するものと体系的に対応するような、存在的対応関係の固定した集合（a fixed set of ontological correspondences）のことであり、簡単に言えば、隠喩＝写像＝存在的対応関係の集合ということになる。例えば、「恋愛は、旅である」写像は、恋人が旅行者に対応すること、恋愛関係が乗物に対応すること、恋人の共通の目標が共通の旅行の目的地に対応すること、恋愛関係の困難が旅行の障害物に対応することなどの、起点領域に属するものと、目標領域に属するもの間の存在的対応関係の集合のこととなる。そして、ものに関する存在的対応関係の集合は、知識に関する認識的対応関係の集合（起点領域に関する知識と目標領域に関する知識の間の対応関係で、前者から後者への写像が行われる）の特徴を規定することになる。更に、恋愛、怒りなどのような感情的な概念だけでなく、最も基本的な抽象概念（時間、量、状態、変化、行動、目的、等々）の多くも、隠喩によって理解されるのが普通であるとしている。一例を挙げれば、量の概念の場合、“prices rose”（「価格が上昇した」）、“his income went down”（「彼の所得が下がった」）、その他の無数の言語表現によって、MORE IS UP metaphor（「多は、上である」隠喩）と LESS IS DOWN metaphor（「少は、下である」隠喩）が示され、量の目標領域（多—少）が鉛直性の起点領域（上—下）によって概念化されていることが明らかになる。

そして、慣習的な概念的隠喩（＝慣習的な隠喩的写像）の経験的基盤に関して、“prices rose”，“his income went down” などのような言語表現で見られる「多は、上である」隠喩を例にして説明している。「多は、上である」隠喩は、例えば、容器に更に多くの液体をそそげば、水面の

高さが上昇するのを見たり、その他の類似の現象を見たりする日常生活での経験を基盤にしており、その経験によって、量（prices）の概念領域と鉛直性（rose）の概念領域の間の対応関係（経験上、多は、上に対応すること）という構造が明らかになる。結局、現実の経験で得られる対応関係が、隠喩における対応関係の基盤となるのである。しかし、“prices rose” の場合のように、現実の経験によって、量（prices）と鉛直性（rose）の対応関係を得ることはできないが、その他の多くの事例で見られる対応関係を基にして、量を鉛直性の観点から理解できることになる。

更に、慣習的な概念的隠喩の体系の大部分は、無意識の内に、機械的に、目立った努力なしに、絶えず使用されるのであり、その意味で、生きているとしている。最後に、慣習的な概念的隠喩と隠喩的言語表現の関係の説明を見ることにする。Searleの例“Sally is a block of ice”について、“a block of ice”は、温度の領域に関するものであるという知識を呼び起こし、しかもSallyという人間に関する述語であるので、どのような人間であるのかという知識も呼び起こし、それら二つの知識が既存の慣習的な AFFECTION IS WARMTH metaphor（「愛情は、温かさである」隠喩）を始動させ、その「愛情は、温かさである」隠喩が、“a block of ice”に関する冷たく、すぐに、または容易に暖まらないものであるという知識を、Sallyに関する愛情が欠落し、すぐに、または容易に情愛の深い人にはなれないという知識に写像することになり、結局日常的な知識と慣習的な概念的隠喩だけで、それ以外のものは全く必要とせずに、説明できるとしている³⁴。

Lakoff は、実に数多くの言語表現を調べ、そのことで非常に多くの慣習的な概念的隠喩の存在が明らかになったとしており³⁵、Lakoff 自身が言うように、巨大な隠喩体系が発見されたと言えるかもしれない。しかし、言語の根底にある概念体系には、数千もの概念的隠喩が含まれていると言う程³⁶、膨大になった隠喩体系をどのように系統立てて整理し、まとめあげていくかが問題であり、数千もの概念的隠喩が現実化して表面に現われる言語表現は、更にその数倍、数十倍になり、同一の言語表現が幾つかの異なる概念的隠喩の実現化されたものとなり（また、同一の言語表現は、文字どおりの発話においても、隠喩的発話においても使用される）、その場合の概念的隠喩と言語表現の関係をどのように系統立てて説明していくかが問題であり、私達の概念体系の下位体系として、しかもその中心に位置する隠喩体系に含まれる数千もの概念的隠喩（だからこそ、隠喩の遍在性とか、日常生活に浸透した隠喩とか主張できる訳で、私達の思考と行動が隠喩的に規定されるとも言える）が、現実の経験（直接的であれ、間接的であれ）を基盤にしていて、概念的隠喩と経験の関係の仕方をどのように説明していくかが問題であり、そのような問題は、隠喩の一般理論の構築を目標とし、経験的（実験的）研究から得られる証拠を根拠にしてその目標を達成しようとする Lakoff にとって、どのように解決されていくのであろうか。

Lakoff の主張に関して、詳細に検討することはできないので、幾つか気が付いた点を述べることにする。Lakoff にとっての隠喩理解過程は、まず最初に、文の慣習的意味があり、その意味によって呼び起こされる知識があり、その知識が文とは独立して、すでに存在している（人々

の心の中にある) 慣習的な概念的隠喩を始動させ、その隠喩が文の中の隠喩的表現部分(文全体でも構わないが)に関する知識を起点領域から目標領域へと写像することを可能にさせ、最終的に隠喩的文の意味(隠喩的意味)が得られるという過程のことであり、Searleにとっては⁶⁷⁾、まず最初に、発話が隠喩的発話であるかどうか(話し手が隠喩的に“S is P”と言い、それとは別の“S is R”を意味しているかどうか)を決める為に、発話を文字どおりに受け取り、欠陥が全くなければ、文字どおりの文の意味がその発話の意味となり(文字どおりの発話)、欠陥があれば、文字どおりの文の意味とは異なる発話の意味を探し出す必要があることになり、そこから隠喩的解釈が実際に開始し、そこで知識を活用して、まずPの様々な特徴を探して、Rの候補者に成り得るものを見つけ出すことになるが、それだけではRを確定できず、次にSを調べて、多くのRの候補者の内、どれがSの特性に成り得るかを明確にすることで、Rが確定され、最終的に隠喩的発話の意味(隠喩的意味)が得られるという過程のことである(Lakoffにとっても、またSearleにとっても、聞き手が瞬時に、しかも容易に処理できる過程としてある)。両過程を比較して、最初に言えることは、Searleの場合、発話が隠喩的発話であるかどうかを決めることが、第一段階として位置付けられ、しかも文字どおりの文の意味が基準となって、それとの関係で欠陥性が問題にされている点である(Searleの四つの欠陥性は、Levinの指摘どおり、二つに大別されるべきである)。勿論、Lakoffの場合も、明確な形では示されていないが(むしろ、問題にしていないが)、文の慣習的意味によって呼び起こされる知識が、慣習的な概念的隠喩を始動させるかどうかによって(概念的隠喩を媒介にするかどうか)、発話が隠喩的発話であるかどうかが決められると言えるが、文字どおりの文の意味が基準になることはなく、従って欠陥性も問題にならないことになる。そのような食い違いは、隠喩の捉え方の相違によるもので、文字どおりの文の意味とは異なることを意味するものとして隠喩を捉えるSearle(文字どおりの文の意味以上のことを意味するものが間接的言語行為となり、文字どおりの文の意味の反対のことを意味するものが反語となる)と、ある概念が別の概念によって理解されるものとして隠喩を捉えるLakoffという相違から生じることになる。つまり、文字どおりの文の意味を基準にして、各発話がどのようにずれるのか、それともずれないのかが理解されるのに対して、ある概念(例えば、人の性格)がそのままの形で理解されるのか、それとも別の概念(例えば、温度、味覚など)によって理解されるのかという具合である。そのことはまた、隠喩(的言語表現)の領域の相違にも現われ、死喩・慣用句を文字どおりの発話と同一扱いできるとするSearleにとっての隠喩の領域(前述したように、必ずしも明確な線引はできないが)と、文字どおりの文の意味との関係ではなく、あくまでもある概念が別の概念によって理解される限り、隠喩的言語表現であるとするLakoffにとっての、死喩・慣用句も含まれる隠喩的言語表現の領域(死喩・慣用句は、慣習的な概念的隠喩ではなく、隠喩的言語表現の問題となる)は、当然の事として、異なることになる。

次に、隠喩的意味の具体的内容の確定方法に関しても、Lakoff と Searle の間では相違が見られる。Searle の場合は、P の様々な特徴（顕著で、よく知られている特徴）が R の候補者になり、S の特性に成り得るものを見つけ出す為に、それら多くの R の候補者を絞っていき、最終的に R を確定するという具合に、S と P に関する知識を基にしながら R を確定することになり、隠喩的意味の具体的内容の確定方法がある程度は明確に示されている（例えば、Levin の言うような多義的隠喩の分析はなされていない為、全ての隠喩に言えることではないが）。“Sam is a pig” を例に取れば、豚の様々な特徴の中には、性格・態度、体型、食べ方・食べる量などがあるが、どれが R の最終候補者に成り得るのか、Sam の特性に成り得るのかについては、Sam に関する聞き手の知識、コンテキストなどによって確定できることになる。勿論、全ての隠喩がそのような形で簡単に処理できる訳ではないが。例えば、ある女性の美しさを花で表現する時、どの花を選んでも、全て同一であるとは言えず、聞き手側から言えば、その女性を知っていても、コンテキストを考慮に入れても、その隠喩的意味の具体的内容は確定できないであろう（美しさを表現していることは理解できても、どのような美しさか、それに付随するものは何か、そのようなことに関しては、確定できない為）。それに対して、Lakoff の場合、隠喩的文は、慣習的な概念的隠喩が現実化して表面に現われる言語表現であるが、その概念的隠喩は上位範疇に属し、具体性に乏しいもので、それによって隠喩的意味の具体的内容を確定することはできず、隠喩的文の言語的意味に関わる知識が必要になってくるであろう。しかし、前掲の例を使用すれば、豚によって呼び起こされる知識といっても、性格・態度、体型、食べ方・食べる量などが含まれ、どちらを取り上げるかがはっきりしなければ、その知識によって始動させられる慣習的な概念的隠喩が何であるのかが確定できず、たとえその概念的隠喩が確定され、その概念的隠喩が豚に関する知識を Sam に関する知識に写像するにしても、その豚に関する知識がはっきりしない以上、Sam に関する知識もはっきりしないことになってしまう。従って、隠喩的意味の具体的内容の確定方法は、明確には示されていないと言える。隠喩的意味の具体的内容を確定する為には、豚に関する知識と Sam に関する知識の関係の中で、性格・態度、体型、食べ方・食べる量などからどれを取り上げるのかがはっきりされなければならない、その意味では、Searle の主張を受け入れることになるであろう。そのことは、文の言語的意味の重要性、そしてそれに関係する知識（少なくとも、話し手と聞き手が共有する知識）とコンテキストの重要性を表すことになる。しかし、隠喩的解釈に関する第四原則のところ、例えば、“Sally is a block of ice” の場合、温度の冷たさ(P)と感情の欠如(R)は、本来異なるものであるが、私達の心の中で両者が関連づけられるのは、文化的に、または自然に決定される感性によるものであり、また知覚、感性、そして言語的慣習によるものであるとし、そのつながりを私達はすぐに感じると Searle は言う³⁸⁾が、Lakoff にとっては、極めて曖昧で、その理由が述べられていないものなのである³⁹⁾。隠喩的意味の具体的内容の確定方法は別にしても、P と R の関係の仕方を明確にする必要があるが、Searle の説明は曖昧で

あり、また Morgan のように⁽⁴⁰⁾、神話的類似（例えば、ふくろうと賢さ、きつねと利口さ、蛇と卑劣さなどの関係は、人々の共有する神話である）として処理することはできないであろうし、Lakoff によってその問題が積極的に取り組まれ、慣習的な概念的隠喩の存在によってはっきりと説明されていることは事実である。但し、Searle にしても、根本的には日常的な経験に基づくものであるという基本線は、Lakoff と変わらないであろうが。最後に、話し手と聞き手の関係から捉える Searle と、社会全体から捉える Lakoff（慣習的な概念的隠喩の中には、普遍的なもの、一般に普及したもの、そして文化特有なものがあるとしており⁽⁴¹⁾、決して個人的なもの、そして特定集団のものではない）という相違は、上記の相違の根底にあると言える。

おわりに

Searle の隠喩理論と Lakoff の隠喩理論の一部を簡単に検討したにすぎず、従ってそのことで理論全体の正当性を問題にすることはできないが、それぞれの特徴と相違は、ある程度は明らかになったと思われる。更に検討することが必要であるが、そのことは今後の課題にして、ここでは隠喩の遍在性に少し触れて、終えることにする。隠喩の遍在性の真偽は、隠喩をどのように捉えるかに関わる問題であり、直ちに解決できるようなものではないであろうが、少なくとも隠喩を稀で、例外的であるとする古典的な考え方を否定することはできる。というのは、様々な現実、そして自分の感情、考えなどを簡潔に、的確に表現しようとする時、そして相手にわかりやすく、納得できるように表現しようとする時、全て文字どおりの発話だけで済ますにしても、それに必要な十分な語または言語表現を私達は持っている訳ではないからであり、言い換えれば、全てを文字どおりの発話だけで表現するには、私達の使用している言語自体に限界があるからである。つまり、簡潔に、的確に、わかりやすく、納得できるように表現する為には、隠喩を使用する以外の表現方法を見い出せない場合が多くあるからである。そのように考えると、隠喩を使用せざるをえない必然性が明らかになり、隠喩の存在意義も十分理解できることになると言えよう。そして、Lakoff 的説明をするのか、それとも別の説明をするのかは別にして、隠喩が重要な表現方法であり、広く浸透し（遍在性とは言えないまでも）、必要不可欠な表現方法であることは、認めざるをえないであろう。

(注)

- (1) Ortony, Andrew (ed.), *Metaphor and Thought*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993. 本稿で検討した論文は、全てこの著書に収められているものである。
- (2) Lakoff, George and Mark Johnson, *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press, 1980.
- (3) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.244.
- (4) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", pp.203-204.
- (5) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.237.

- (6) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.239.
- (7) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.239.
- (8) Ortony, Andrew, "Metaphor, language, and thought", pp.9-10, p.11, p.15.
- (9) Searle, John R., "Metaphor", p.87.
- (10) Searle, John R., "Metaphor", p.84, p.90.
- (11) Searle, John R., "Metaphor", pp.102-103.
- (12) Morgan, Jerry L., "Observations on the pragmatics of metaphor", pp.124-125, p.127.
- (13) Levin, Samuel R., "Language, concepts, and worlds: Three domains of metaphor", p.112.
- (14) Searle, John R., "Metaphor", pp.104-108.
- (15) Searle, John R., "Metaphor", p.90, p.110.
- (16) Morgan, Jerry L., "Observations on the pragmatics of metaphor", pp.129-130.
- (17) Searle, John R., "Metaphor", pp.98-99.
- (18) Searle, John R., "Metaphor", p.90, p.103, p.110.
- (19) Searle, John R., "Metaphor", p.88.
- (20) Searle, John R., "Metaphor", p.104, p.105.
- (21) Searle, John R., "Metaphor", p.88.
- (22) Levin, Samuel R., "Language, concepts, and worlds: Three domains of metaphor", pp.116-119.
- (23) Levin, Samuel R., "Language, concepts, and worlds: Three domains of metaphor", pp.121-122.
- (24) Gibbs, Raymond W., "Process and products in making sense of tropes", pp.254-255.
- (25) Glucksberg, Sam and Boaz Keysar, "How metaphors work", pp.402-406.
- (26) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", pp.204-205, pp.218-219, pp.227-228, p.237, pp.238-239.
- (27) Gibbs, Raymond W., "Process and products in making sense of tropes", p.275.
- (28) Gibbs, Raymond W., "Process and products in making sense of tropes", p.253, p.258.
- (29) Gibbs, Raymond W., "Process and products in making sense of tropes", p.276.
Glucksberg, Sam and Boaz Keysar, "How metaphors work", p.424.
- (30) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", pp.246-248.
- (31) Gibbs, Raymond W., "Process and products in making sense of tropes", p.257.
- (32) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.205.
- (33) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.237.
- (34) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.203, pp.206-209, pp.213-214, pp.238-239, pp.240-241, pp.244-245.
- (35) George Lakoff と Mark Johnson 共著の *Metaphors We Live By*, George Lakoff 著の *Women, Fire, and Dangerous Things* (Chicago: The University of Chicago Press, 1987) などがある。
- (36) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.203, p.239.
- (37) Searle, John R., "Metaphor", pp.102-108.
- (38) Searle, John R., "Metaphor", p.98, p.105.
- (39) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.239.
- (40) Morgan, Jerry L., "Observations on the pragmatics of metaphor", p.130.
- (41) Lakoff, George, "The contemporary theory of metaphor", p.245.